
9年目越しの想い

馬虎兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

9年越しの想い

【Zコード】

Z6714C

【作者名】

馬虎兎

【あらすじ】

キミの隣には、ボクじゃなくカレがいる。心にポツカリと穴が開いたように、何かが無くなつた。あんなに一緒に時を過ごしたのに。

『おめでとう』

心にも無い事を、言った。

今日は、キミの結婚式なのに心から祝えない。

今、キミは素敵なカレを見つけ、友人から祝福を受けている。

ボクは、そんなキミを一步輪から離れて見つめていた。

あんなに一緒に時を過ごしたのに、キミの隣にはボクじゃなくカレがいる。

何故か、悔しいと言つた感情は無かつた。

ただ、ポツカリと穴が開いたように、何かが無くなつた。

ボクとキミが、初めて逢つたのは9年前。ありきたりな友人の紹介だった。

まだ当時はボクも17歳で、キミは一つ下だった。

『高校生』そんな響きも懐かしくなる年齢にもなつたと思つ。

初めて逢つたとき、年下の割には大人っぽい子だなあ～って思った。

正直、一目惚れだった。

まだ、女性と付き合つた事の無かつたボクにとっては、『高値の花』。

それがキミの印象だったよ。

『恋はするものじゃなく、落ちるもの』何処かで聞いた台詞。

まさに、それだった。

ボクはキミに『恋葉のよう』、『恋に落ちた』。

思春期のボクはなかなかのヘタレで、女性の接し方が解らなかつた。

どどどんキミの事を好きになつて行くのだけは解つていた。

そして、無謀な告白をしてしまつた・・・振られた。

解つていた事なのに、自分で自分を傷つけて、キミとの接点を失つた。

まさに『自業自得』。

新婦の友人で男はボクだけ。元職場の人間はもううん男性もいる。今の時代は新婦が男友達を呼ぶのはそんなにダメじゃないらしい。

ボクは女友達とともに、結婚式に出席した。

純白なドレスにいつもメイクとは違ひキニが、ベールの下で少しつつむかへ

ボクの横を、おじさんと一緒にゆっくりと通り過ぎた。

素直にキレイだった。

最近購入したデジカメ。この日のために買った用なもの。キニをたくさん撮るために。

液晶から見るのはとても綺麗で幸せな顔。カレを見つめる、その顔がとてもいい表情をしていた。

キニは、ボクに気付き、笑顔でボクの元にやって来て

『ありがと』

・・・『おめでと』

自分の言葉に、心が軋む音が聞こえた。

非現実なことを思つてしまつ。ドラマやマンガみたいに過去に戻れたら・・・なんて。

昨日をして半年が過ぎ3年生になつた。それなりに大きくなつていたけど半年もたてば、どこか心の奥に閉まつておける。

高校生なんて頭の中の半分は『恋に恋してる』ような生き物だから（ボクは特にそうだった）次の出会いを探していた。

その日は、隣町の七夕祭りでキミの通りでいた高校の文化祭。

『・・・そんな事ありえない。ドリマジもあるまいし。』『七夕だからって『『冗談じゃない』

期待していた。

ボクは友達と、文化祭に薔《出会い》を探しに出かけた。

うろちゅうしていたら、『ボクとキミ』の仲介人のマサルを見つけた。

マサルは『キミ』と同じ高校で、ボクと同級生だ。マサルは向やら悪い顔をしてニヤニヤしながらボクに近づいてきて、

『2 B』それだけ言つて、また自分のクラスに戻つていた。

『ムカツク』心中を見透かされた気分だった。

忘れようとしていたのに文化祭なんかに来たのが、そもそももの間違いで、そんな事を言われば余計に意識して探してしまう。

なるべくその教室には近づかないようにして、グルグルしながら校舎を見て回つた。

まあそんな意識して歩いてればどうしたって似ている子には目が行き、見つけるのはそんなに時間はかからなかつた。

『よつ、久しぶり』としか出でこなかつた。

『久しぶり』キミは何も無かつたかのよつに、自然に振舞い、笑
いかけてきた。

僕の中の『キミ』と書かれた心の引き出しは簡単に引き出され、
半年前の想いが溢れ出てきた。

半年前の出来事が何も無かつたかのよつにキミはボクに話しけ、
ボクもそれに合わせたかのように、

内容の薄い話をして、別れた。ボクは心の底からヘタレだ、確信し
た。

また遭遇してしまつのが嫌で、友人に無理を言つて帰る事にした。
だが、その日は七夕祭り。気分を変えてまた新たな場所で薔薇を探す
ことにした。

祭りに来たのはいいけど、ヘタレが一人。ナンパなんてものはしたこと
がなく、出会いもあつたもんじやない！

当然、収穫は0。夜も遅くなり、トボトボ歩いて疲れたので帰る事
にした。

（この日は七夕、空を見上げれば、満天の星空。織姫と彦星はこの
日を待ちわびたに違ひない。）

奇跡は起きた。

『あれ？ 偶々然！』

少しハスキーだけど、女性特有の高い声が、斜め後ろからボクの肩を叩くと同時に聞こえた。

キミがいた。

（おこおこ、ドリマジヤね～ぞ。）そんな声が聞こえてくる。

「一旦」一度も会つて、運命？ 織姫と彦星に感謝すらしたくなる。一度目の再開は、話が弾んだ。昼とは違い、祭りが後押しするかのように、自分でもピックリするくらい話した。

話の内容なんて覚えちゃいない。ただこの時間が楽しくて、夢の中にでもいるかのようだった。

現実は違う、帰るときになつた。『帰りたくない、また逢いたい』そんな気持ちが渦巻いた。

『今度・・・』

自分で驚いた。ヘタレなボクがキミを誘っていた。

『今度・・・みんなで遊ぼうよ。』

所詮、ヘタレ。一度振られて臆病になつているのか、一人で遊ぶ勇気は無かつたらしい。

『いいよ。じゃあ来週の・・・。

』

また、キミとの道が繋がった。

夏のあの夜 - 田舎へ（前書き）

キリの隣にはカレがいて、ボクじゃない。

キリと再会したあの夜、ボクは偶然じゃなく、運命的なものを感じたよ。

夏のある長い一日～夏～

『明日から、夏休み。何してやろうか。』

なんてバカなこと言つている高校3年はボクぐらいだろうか？

高校3年といえば受験勉強で、大変な時期なのに、ボクは余裕だった。

進学校でもなかつたけど、大学に行く人はもちろんいて、ボクの周りの友人も進学が希望だった。

しかし、ボクは余裕！なぜなら進路の事で担任に、迷惑をかけたことが無い為か、

すでに専門学校の推薦枠を貰い、クラスの中で一番最初に『自由』を獲得したのだ！！

だが、そんな自分も受験勉強なんかよりも大変な時期だった。

七夕祭りの帰りに、『ボクとキミとみんなで遊ぶ』と言つフレミアチケットを手に入れたのは、

いいけど、何をどうして遊んだらいいのかが解らない。そして出了
答え！

『やっぱり、夏休みに入つてから遊ぼうよー。』

本当に、反吐へどが出るくらいのヘタレつぱり・・・。

「の9年間、もちろんボクにもそれなりに『彼女』と言つ人はいた。

でも、キミの事を嫌いになつたわけでもなく、忘れたかった訳でもない。

今、思えばキミとの関係をいろいろな意味で発展したくなかったのだと思つ。

『「のままだ・・・いい』

付き合つてきた彼女達の事は、もちろん好きだった。でも心の中では、

いつもキミは特別だつた。

そのドレスも、指輪も、誓いのキスも、キミの笑顔も、全部ボクが与えてあげたかった。

ボクが9年かかっても、出来なかつた事を1年半でキミの隣にいる力レガ成し遂げた。

酒の席で交わした約束。

ボクに投げかけて来たキミのあの言葉。

『お嫁に貰つてよね！』

『お互いが余つてたらな。』

酔っていたとは言え、正直、嬉しかった。

キミは冗談だつたかは解らない。けど、ボクは強がつた言しか言え
ないくらいに、

照れていて、キミの顔を直視できなかつた。

『眠れない・・・。』

もう自分から逃げる事は出来ない。嬉しいはずなのに、半年前の
記憶が甦る。

7時間後には、キミと会えるのに、考える事は無様に終わつたあの
日の出来事。

遊ぶと言つても、キミと一人じゃない。ヘタレ2号もいる。

不安と喜びと期待が飛び交つ中、

頭がオーバーヒートしたのか、気がついたら朝10時。

いつの間にか寝ていた。

高校生の脳会議はあまり長い時間は向いていないよつだ・・・。

お昼過ぎにミツルがボクの家に迎えに来る。

『ミツル』はヘタレ^{ヘタレ}。『』については定時制の高校のため、車の免許を持つている。

『・・・便利なヤツ』

まだ冷房が効いてないクソ暑い車に乗り込み、『コキ』の家に向かう。

キミとコキは家が隣同士で幼馴染だった。

キミとコキはもつ家の外で僕たちを待っていてくれた。

『おまちいー』

ミツルが言つと、

『遅いよーーー』

コキが冗談交じりに言つと、ミツルのおでこを『ペッシー』

『』は関東でも田舎の県で都会のように遊ぶ場所が少ないので、

行く場所なんて、いくつも無いので大体決まっている。

ボク達は昼間から、カラオケに行く事にした。

5時間コース。

ボクはこの後どーするのかが、非常に気になっていたその時、

『メシは?』

バカな聞き方でミツルが、突破口を開いた。こんなときはバカで助かつた。

『まだ、キミと一緒に時間が過ぎさせる。』

夏のある日～一日～夏の風物詩～（前書き）

暑い一日が始まった。

ボクとキミと友人二人でダブルデート。
ウキウキな昼間の時間を過ごした。

夏のあらわしでー一日へ夏の風物詩へ

『「Jの後ビーしょーか?』

ボク達は夕食を食べ終えると、

ユキの提案で非常にベタだが夏の風物詩『肝試し』に行こうことにした。

『ミシくん、知ってる場所ある?』

『俺、オススメ知ってるからそこでいい?』

やいは隣の県で、山の中のトンネルだった。

昔、車線を増やすためにもともとあったトンネルの隣にもう一つのトンネルを作つている途中、

作業中に事故があり多くの作業員が亡くなってしまった。

その後、トンネルを通ると心霊現象に遭う用になり、地元の心霊スポットに今もなっている。

こんな場所に行く連中はだいたいは靈感がない奴が多くて、ボク達もその部類だった。

『ビーする。塩でも買つていいく?』

『懐中電灯はあるの?』

『ZIPPOでもいい?』
・・・良くないから。

正直、ボクは苦手なほうだった。特に靈感が強いわけじゃないけど、

その場所によつては背筋に悪寒を感じることもあるつて、今までねるべく心霊スポットに行くのは避けて来たのだ。

『 もうそろそろトンネル。

ミツルが呟つと、キミは、

『やあ、どうでヤジナしてた？！』・・・楽しもう。

『あー帰りたい』心中で何回つぶやいたことか。そんなボクの気持ちも知らずに、ミツルがワクワクしながら、

『通のよへ』

何も起こらない。

そんな簡単に何か起きてもらつても困るけど、拍子抜けして、
はあ。』とつ、緊張の糸が切れると、

『実はもう一つ。』

「事故があつた方のトンネルがあるんだよねえー。言つてなかつた

『さあ、当時の事故からそのままになつていて、わざわざのトンネルの
隣にまだあるんだよねえー。』

『本当にーー?』

『どーするー行っちゃつかいー?』

『こいつがやつー!』 ×2

・・・『マジですかあ。』

来た道に戻るためにコターンをして、またトンネルに向かった。

夏のあ〜長い一日～夏の風物詩～（後書き）

長い夏の、暑い一日。

ボクがキリとの距離を縮めたこの日。
ボクは、この日が無かったらキリといふにも長く時間を過ぎせり
は無かつたと思つ。

馬鹿兎と言ひます。

不定期な投稿ですいません。

不細工な物ですが、少しずつ投稿していきます。

良かつたらご意見も頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6714c/>

9年目越しの想い

2010年10月20日19時34分発行